



2026. 8. 10 発行 ニュースレター第348号

〒262-0019 千葉県花見川区朝日ヶ丘 5-24-2

TEL. 090-7941-7655 FAX: 043-483-0027 代表：小西 由希子

E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com , Home Page: <http://www.ceic.info/>

写真等無断転載禁止

2026 年台湾日本ジオパーク会議 に参加して

NPO 法人 ちば環境情報センター 代表 小西 由希子

1. 初めに—お誘いいただいた理由

台湾ジオパーク学会所属の劉淑恵さんより、市民が主体的に関わっている里山保全の在り方について話してほしいとの話がありました。

劉さんは、台湾高雄師範大学の教授を数年前退官され、現在は政府の土木工事の審査などに関わっていらっしゃるそうです。劉さんは日本の大学で博士号を取得し、その後日本の大手建設会社に就職、その後台湾に戻って大学の先生になりました。地理がご専門ですが、ジオパークの関係から里山保全活動に関心を持たれ、20 年前頃から交流してきた経緯があります。

台湾の市民活動はどちらかというとまだ政府主導で、自立した形になる途上のようなようです。ジオパークの保全も市民の力が欠かせませんが、私たちの活動を参考にしたいと依頼されました。

「日本ジオパーク」には銚子をはじめ 48 地域が、そのうち 11 地域が「ユネスコ世界ジオパーク」に認定されています。ジオパークでは保全と活用を地域住民が担っていくことが大切とされています。この点が里山保全と大変よく似ているのです。

ジオパークとは：地球科学的意義のあるサイトや景観が保護、教育、持続可能な開発のすべてを含んだ総合的な考え方によって管理された、1 つにまとまったエリアです。ジオパークは、歴史と現代社会における地域の地質遺産の重要性について意識を高めることで、地域住民が自分たちの地域に誇りを持ち、地域と住民の一体感を強化します。地域の地質資源を保護しながら、ジオツーリズムを通じて新たな収入源を生み出し、革新的な地元企業や新しい雇用、質の高い研修の機会を創出します。（日本ジオパークネットワークより）

2. 2026 年台湾日本ジオパーク会議

日 程：2026 年 6 月 25 日～27 日

会 場：インハウス ホテル イエリョウ（蔓悦酒店野柳渡假館）

テーマ：地質公園経営管理、景観保全、海洋保全、文化景観保全等の関連議題

プログラム：ジオパークを管轄する農業部林業自然保護局長と台湾海洋大学海洋自然管理学教授による基調講演の後、台湾のおよび日本のジオパークに関する講演がありました。

日本からは、糸魚川と美祢市（秋吉台）（2026 年 4 月認定）ユネスコ世界ジオパークと金沢大学から参加がありました。

日本の里山に関する講演は以下の通りです。

① 水域の生物多様性保全の重要性と市民による保全：田中正彦（ちば環境情報センター）

千葉市下大和田谷津田における 25 年間の地域主導型保全活動とその成果に関する報告。この活動は、都市環境の中に豊かな生物多様性を擁する里山景観に焦点を当てている。

これらの地域に生息する貴重な動植物は、稲作や森林・水辺生息地の管理といった積極的に人がかかわることによって保全されている。多様な生態系サービスを提供する領域として、里山保全活動は、野生生物だけでなく、参加者自身の幸福にも大きな相互利益をもたらしている。発表では、谷津田や谷津田を流れる小川に貴重な生物が生息していることを、千葉市と佐倉市の魚類調査の結果から示した。この環境を維持するための米づくりを中心に谷津田での実践例を紹介し、生物多様性を長期的に保全するための方法を提案した。



② 常緑広葉樹の風倒メカニズムに基づく管理方法：小林達明（千葉大学名誉教授）

台湾では台風などによる樹木の被害が大きい。自然の力を生かした防災方法があれば教えてほしいとの要請での講演であった。

樹木の枝の広がりや樹種によって強風に対する抵抗力に、差があること、沖縄で風よけに植えられているフクギは、もともとは台湾の樹木で、防風のための移入されたものもあるとのことでした。

講演要旨：常緑広葉樹は風害に強いと言われていたが、最大瞬間風速 57.5m/s を記録した 2019 年房総半島台風では、マテバシイ林に激甚被害が発生した。小泉（2022）に従った力学的解析によって、林分状樹木に比べて単木では風荷重が大きいこと、マテバシイ幹の曲げ強度は強いが、樹形から風荷重が大きくなり幹折れや根返りが生じやすいこと等がわかった。こうした分析を踏まえながら、常緑広葉樹林の適切な管理方法について検討した。



③ コモンズとしての里山 その開発との向き合い方：小西由希子（ちば環境情報センター）

保全活動と、生物多様性や景観の保全・地下水涵養や防災機能などコモンズとしての谷津田の価値について紹介しました。開発問題に対しては、環境影響評価で保障されている権利を最大限活用して私たちにできることを行っている現状と将来のまちづくりへの提案をおこないました。

会場には 20 代から 70 代まで 100 人ほどの参加者がありましたが、川遊びや米作りの様子を見てやったことがあるか聞いたところ手を挙げたのは 3 人だけ。意外でしたが、台湾でも田んぼに入って米作りをするなんてとても珍しいことのようにでした。ぜひ日本で稲刈りを体験したいと、少し時期は遅くなりますが、11 月に今度はジオパーク関係者が千葉に来ることになりました。



3. エキスカーション

2 日目の午後と 3 日目は、エキスカーションとして台湾北東部の鼻頭龍洞地質公園、黄金博物館（九份・金瓜石・水湳洞地質公園）、獅頭山公園、野柳地質公園などのジオパークをめぐりました。

4. 感想その他

美祿市では

ジオパークは、地質資源を保護しながらツーリズムで収入を生み、企業参加や雇用創出、研修も目的としていますが、オーバーユースの課題があります。さらに市民による自発的な活動も大切です。秋吉台で有名な山口県美祿市は今年 4 月ユネスコ世界ジオパークに認定されとても元気に運営されている様子が報告されました。市域と認定区域が一致していて運営しやすいこと。また所管が教育委員会であること。ジオパークが教育の視点を重要視していることから事業を進めやすいようです。さらに、ガイド(有償)の養成講座募集では子育て世代に声掛けし、比較的若い女性が多く活発に活動しているそうです。ジオパークのロゴがついた地元商品も好評で新たに参入希望する事業者も増えているということでした。

日本との交流

台湾はユネスコの加盟国でないため世界ジオパークの認定はありませんが、銚子地域が台湾ジオパーク認定、法に基づく「台湾地質公園」として管理されています。また台湾と日本間で盛んに交流が行われているようです。

地理系の学会は歩く、歩く、歩く

台風で 3 日間とも雨でしたがエキスカーションは中止にならず予定通りすべて実施。傘をさして毎日 1 万歩以上歩きました。皆さんのパワフルさにびっくりでした。



台日ジオパーク会議会場風景(6月25日)

龍洞灣岬海食洞(6月26日)

水湳洞地質公園黄金博物館(6月27日)

子どもが自然とゆたかにかかわるために
大人がしなければならない事を考える その4
～農村の自然性と環境性～

子どもと自然学会 船橋市 岩田 好宏

私が1991年まで勤めていました習志野市立習志野高校の前の道路の反対側に、農家の跡地がありました。生垣や庭木などの一部が残っていて、まわりは松林でした。それは、台地の端にあり、すぐ裏は実籾谷の低地が広がっていました。農家跡地からは細い道が実籾谷に向けてありました。明治期の陸軍参謀本部制作の迅速図では、谷は一面水田だったようで、そのまわりの台地面のほうは、畑と林が広がり、斜面は林だったと考えられます*。

これから推定しますと、この地を訪れて開拓しようと考えた人たちは、まず谷低地に水田をつくることを考え、その近くのゆるやかな南向き斜面や台地面に家・屋敷をつくり、そこから近い台地面あるいは南向き斜面に畑をつくり、北向き斜面や、屋敷から遠いところには薪炭林などをつくったとみました。この実籾・東習志野の場合、それまであった野生状態の林が伐採され、焼かれて農村が形成されたと思います。農村の自然は、人為的に改変されたものです。そのようにしてできた農村の自然と環境としての意味の関係をみますと、次の表のようになります。

ではどのようなはたらきかけがされるのでしょうか。河川敷の植物群と対比しながら考えますと、次の図のようになります。

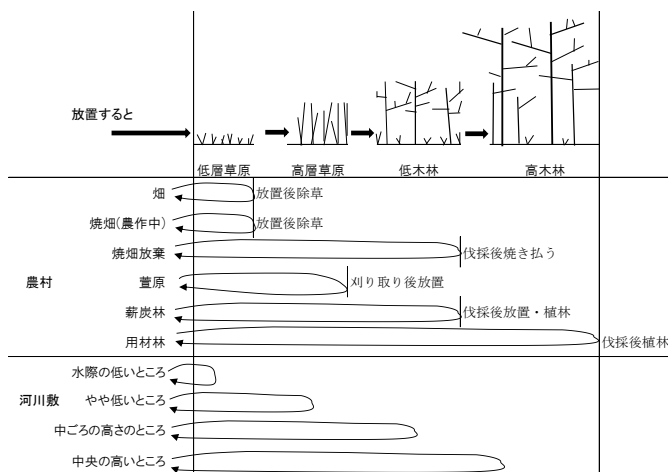


図 畑と河川敷の植物遷移の比較

畑では、人間による管理・収穫によって植物群は破壊され、遷移がとまって初めにもどります。たとえば蔬菜畑では、常に作物以外の植物が除かれ、作物は、半年ほどで収穫され除去され、無植物状態になり、あらたな遷移が始まります。河川敷では、水位の上昇、泥土による埋没、土壌に流出によって植物群は破壊され、遷移はとまり初めにもどります。河川敷の周辺部の低い土地の植物の場合は、毎年何回となくみられる雨により発生する水位のわずかな上昇で水没しますから、生育期間が短く小型の植物しか生存できません。それも雨が降って水位が上昇すれば、水没したり流されたりしてなくなり無植物状態になります。

以上が、農作を人間の立場からではなく、自然における変化としてみた場合の実態です。

* :このことは、次で紹介しています。

岩田好宏. 1979. 『生物学教育入門—科学的生物観の基礎』 新生出版. 228-232

通常の呼び名			
水田	食料など有用物生産	単純な湿生草原	
畑	食料など有用物生産	単純な草原	
薪炭林	燃料、その原料の生産	若齢林	
用材林	木材の生産	単純な高木林	
寺社林	文化財	常落・針広混交林	
環境保全林	涵養・防風・防砂・防雪など	常落・針広混交林	
萱原	飼料・肥料・屋根材などの生産	多年生草原	
池	涵養など	水生植物群落	
河川	涵養、通行・運搬	水生植物群落	
道とその周辺	通行・運搬	無植物地帯と低草原	
家屋	住居	無植物	
屋敷	農「内仕事」の作業場、有用生物の培育	荒原	

培養：動物の飼育、植物の栽培、細菌・菌類の培養を總稱する場合の呼び名

またそれだけでなく、人為的に改変されたものは、その後もこの環境維持のためにはたらきかけを受け続けます。はたらきかけをやめて放置すれば、農村特有の自然性は消失し、あわせて環境も失われます。

新浜の話 102 ～ヒメガマからナガエツルノゲイトウ～

1998年の蓮尾嘉彪の定年退職・2年間の再任用の後、NPO法人となった行徳野鳥観察舎友の会（現在は行徳自然ほごくらぶ）が数年かけて、市川市を通した千葉県からの管理委託事業のほとんどを受け継ぎ、若いスタッフも少しずつ増えて、必死に仕事をこなして、ちょいちょい息抜きもやって、と、そこそ順

千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子

調に流れていた月日。長年働いてこられた市職員の宮島君江さんが定年退職され、代わって非常勤の女性の方2名が交代で勤務、次いで同じく市職員の富田孝さんもリタイア、代わってもと小学校の用務員をされていた故神野孝四郎さんが再任用職員として2年、神野さんは後に友の会スタッフに。神野さん

の後任としてもと校長先生の樋口進さんも再任用職員に。神野さんのご友人の故佐々木翼さんが友の会アルバイトに。一方では2001年の緑の国オープンで、シルバー人材センター派遣の60歳以上の方々が週末や祝日に2人ずつ交代で緑の国管理に。いろいろな主体から人が出入りすることになりました。今でも「市川市行徳野鳥観察舎 愛称あいねすと」では市川市職員と、カフェのスタッフと、シルバー人材センター派遣の方々が、そして保護区と野鳥病院の管理運営にはNPO行徳自然ほごくらぶスタッフやボランティア、各学校からのインターン、と、相変わらずいろいろな立場の方々がかかわっています。

野鳥観察舎の歴史には、ボランティアのみで成り立った時期はありません。有償のスタッフが「業務として」かかわり、運営し続けてきました。しかし「無償の」ボランティアやインターン、愛好者の方々がなくして成り立った時期もあります。

2009年2月末には市川市議会議員だった田中幸太郎氏が、観察舎の業務が随意契約でずっと特定のNPO法人に委託されているのはいかなるものか、との質問を出され、これを受けてたしか8月には競争入札が行われました。しかし条件が難しく、鳥の標識調査など特別の資格を必要とする業務もあったため、1、2回不調に終わった後、他社の半額以下だった友の会が落札しました。

2012年には友の会は認定NPO法人となり、寄付された方への免税が認められるように。いろいろと紆余曲折を経て現在に至っています。

さて、それでも延々と続く草とのたたかい。植物たちが生存をかけ、着々と環境に応じて子孫を残し、安定した極相（おそらく温帯の照葉樹林）を目指して遷移して行く状況に抗して、不安定な湿地環境を維持しようとするには、水田耕作と同様の絶えざる干渉が必要です。丈の高いヨシやヒメガマについては、重機やトラクターの助けを借りて、まあまあどうにか、ということころまでは。

その後を受けた南米原産のヒユ科植物、ナガエツルノゲイトウについては、目下戦闘の最中。特定外来生物にも指定され、一時はそのおかげで刈り草の場内焼却処分ができたというメリットもありましたが、水中にも干陸にも、丈高い植生の合間にもひびくオールマイティ。水中にのびる中空の茎は抜く時にシロフォンのような音楽的な音がして、焼くとキューキュー派手な悲鳴を上げて燃えます。1997年に終わった行徳内陸性湿地再整備事業第二期工事の直後に初認、重機についた土の（茎・根断片の）移動で、すぐさま保護区全域に増え、開けた水面を完全にふさぐ状態になりました。

2023年、10年以上もお手上げだった対策に挑んだのは若手常勤スタッフの内田脩太さん。環境保護団体が特定外来生物への対策を目指すのは必須、との信念から、当初は地道に徹底的な除去作業。有効がなかなかからちが明かず、2026年3月からは防草シート・遮光シートで生育を阻み、ゾーニング用のゴムマットの熱殺効果も。まだ先は見えないながら、地道に進めているそうです。

下大和田「お楽しみ会 川遊び」に参加して

千葉市緑区 石井 幸奈

2026年7月25日、待ちに待った川遊びの会に家族で参加させていただきました！当日は蒸し暑い一日となりましたが、ひんやりと冷たい川の中に足を浸すととても心地よく、絶好の川遊び日和となりました。

最初は「ザリガニが数匹見つければいいな」くらいの気持ちで網を手にとった子供たち。しかし、講師の方に捕まえ方のコツを伝授していただくと一変！コツを掴んで味を占めた子供たちは、次から次へと見



事に生き物を捕まえていきました。この日はミナミメダカやドジョウ、シマドジョウ、タモロコ、フナ、ヨシノボリ、小さなエビ、そして本命のザリガニなど、想像以上にたくさんの水辺の生き物と出会うことができました。普段接する地上の生き物とはまた違う発見に、子供たちも大満足の様子でした。

川遊びの後には、講師の方や大学生スタッフによる解説を聞き、お楽しみ会の「ザリガニレストラン」が開店！ボイルしたてのザリガニをみんなで味わいました。カニやエビを思わせる濃厚な旨味と、食べた後も手に残るしっかりとしたダシの強さはクセになる美味しさでした。

素晴らしい夏の思い出をつくってくださったスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

※今月号のスローマンはお休みします。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2026年 9月号（第349号）の発送を 9月 9日（水）10時から千葉市民活動支援センター（千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階）にておこなう予定です。お手伝いいただける方は小西 090-7941-7655）までご連絡ください。

編集後記：総武線から青々とした稲を眺めていたら黄色い塊を見つけました。「んっ！もしかしてサクラオグルマ？」早速車で行ってみました。耕地整理された田んぼの畔に、まだオグルマが残っていたのです。古い友だちに出会えたような喜びでした。いつまでもこのままだと願っています。 mud-skipper 早

参加者24名（大人14名、大学生1名、小学生8名、幼児1名） 報告：平沼勝男

＜小山町の活動＞

☆第 247 回 小山町 YPP「田んぼの草取り」 7月11日（土） 晴れ

ほぼ梅雨も明けたのではないかと思われる気温 32 度の暑さの中、ガビチョウの元気な声に励まされながら古代米を植えた田んぼの草取りをしました。なかには黒米のあるべき場所に丁寧にヒエが植えられたりしていましたが、なんとか 2 時間ほどで作業を終えることが出来ました。

参加者 4 名（大人 3 名、小学生 1） 報告：柳町健治

☆小学校田んぼのイノシシよけネット張り 7月29日（水）晴れ

小学校田んぼに植えたコシヒカリの穂がほぼ出揃い、モミが膨らみはじめています。これからの季節、米を食べにイノシシが田んぼに入り込むことがあるので田んぼの周りにネットを張りました。真夏の強い日差しの下での作業でしたが、学校の先生方のお手伝いもあり、短時間で張り終えることができました。稲刈りまであと 1 か月と少し。無事育つことを祈っています。

参加者 5 名（大人 5 名） 報告：高山邦明

【谷津田・季節のたより】 2026 年 7 月

＜下大和田町＞ 報告 平沼勝男

7/ 5 田んぼの稲の様子を見行くと、稲にアジアイトトンボのペアが交尾をしてとまっていました。草むらにベニカミキリを見ました。この辺ではよくみかけます。クヌギの下にノコギリクワガタがいました。最近見なくなったので、姿を見て安心しました。

7/18 道路わきの草むらで、ニイニゼミが羽化をしている姿をたまたま見つけました。

7/20 ウグイスがまださえずりをしていました。元の YPP 田んぼの畔でヒクイナのヒナ 2 羽が歩いていました。美しいタマムシが飛んでいました。小川ではハグロトンボ♂が盛んに縄張り争い。森では♀1 頭を見かけました。ニイニゼミが森で鳴いていました。

＜小 山 町＞ 報告：夕（碓夕子）・明（渡辺明美）・無記名は高山邦明

セミの初鳴き：ニイニゼミ 7/13、クマゼミ 7/20、ヒグラシ 7/22、アブラゼミ 7/24、ミンミンゼミ 7/26、ツクツクボウシ 7/29

草花の開花：アキノタムラソウ 7/3、ヤマユリ・コマツナギ 7/6、エノコログサ 7/8、ノカンゾウ・アキカラマツ 7/14、ヤマノイモ 7/15、カラスウリ 7/16、セリ・ミズヒキ 7/17、ヒヨドリバナ 7/24

観察記録：7/3 田んぼの畦の草むらにヒクイナの卵が 2 つ産み付けられていた。 7/5 林からサシバが 2 羽飛び出す。親子か、地元の方の田んぼでコシヒカリが出穂、体長 10 センチを超える大きなヤマナメクジが道路をはっていた、田んぼにタイコウチの幼体や卵を背負ったコオイムシの姿（夕・明・高） 7/6 田んぼにアオサギの羽根が散乱。 7/7 ハナйкаダにたくさんの黒い実 7/8 ウスバキトンボが田んぼの上を飛ぶ。 7/9 マユタテアカネが羽化、夏型のホソミイトトンボを見る。 7/10 モズの幼鳥の姿、ホソミオツネイトンボの若い個体 7/11 田んぼにウスバキトンボの若い個体、草むらからキリギリスの音がする。 7/14 モズが高鳴き、再び田んぼにアオサギの羽根が散乱。 7/15 ヒクイナの鳴き音がする（これ以降、ほぼ毎日声を聞く）。 7/17 オオヨシキリのさえずりがしなくなる。 7/19 真っ赤なショウジョウトンボを久しぶりに見る、第 2 世代か、実に久しぶりにカブトムシを見る。山道に小さなヒキガエルがたくさんいた（夕・明・高） 7/22 ギンヤンマのカップルがつながって田んぼの上を飛ぶ、谷津の上空高いところをオニヤンマが飛翔 7/23 オオヨシキリが田んぼで蛾を捕まえる。 7/30 早朝、子連れのイノシシ 2 組をみかける。

【イベントのお知らせ】主 催：NPO 法人 ちば環境情報センター

＜下大和田谷津田＞ 連絡先：小西 TEL. 090-7941-7655 , E-mail : yatsudasukisuki@gmail.com

・第 320 回 観察会とゴミ拾い

日 時：2026 年 9 月 6 日（日） 9 時 45 分～12 時 雨天決行

内 容：秋の花が咲き始め、赤とんぼも色付く頃です。トンボの調査をしながら谷津と森を巡ります。

持ち物：筆記用具、飲み物、長靴、帽子、ゴミ袋、敷物 参加費：100 円

＜小山町谷津田＞

▼第 248 回 小山町 YPP「田んぼの草取り」 田んぼの草取りや畦の草刈りをします。

日 時：2026 年 8 月 12 日（水） 9 時～11 時 ☆小雨決行

場 所：小山町谷津田（千葉市緑区）

持ち物：長靴（田んぼには入りません）・軍手・飲み物（暑いのでたっぷり）

☆どなたでもお気軽に参加いただけます。初参加も歓迎です！参加のご希望、お問い合わせは、ceic.ypp.oyama@gmail.com までメールでご連絡下さい。

